



2023年 (令和5年)

11月号 (No. 942)

公益社団法人

日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

会員の会報購読料は年会費に含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>e-mail ● jac-room@jac.or.jp

22年夏チロルのロングトレッキング 23日間かけて歩いた「鷲の道」

河野 長

近年、ヨーロッパ・アルプスのロングトレッキングを楽しんでいる河野会員の、2022年夏のレポート。オーストリアのチロル地方、東のヴィルダーカイザーから西のヴェッターシュタインまで、23日間をかけて歩いた山旅は知名度こそ低いが変化に富み、整備されたスイスやイタリアのコースとはひと味違った趣があった。

私は2017年からヨーロッパ・アルプスのトレッキングを始めた。そして17、18年はスイスの2つのルートを、また19年にはイタリアのドロミテ地方を歩いた。これらの旅行については、すでに本会の会報「山」で報告させていた。

20年以降もまた行きたいと考えていたところ、ヨーロッパでは22年の春先ぐらいからコロナ禍によ

る規制が大幅に緩和され、旅行を再開できそうになった。しかし、コロナ禍による混乱の後なので、ある程度知っている所に行くのが無難であろう。調べてみると、オーストリア西部のチロル地方に、Adlerweg (アドラーヴェーク「鷲の道」というトレッキング・ルートがあり、全長325kmを24日間で歩くようになっている(地図を参照)。

目次

22年夏チロルのロングトレッキング	
23日間かけて歩いた「鷲の道」	1
2023年度自然保護全国集会を 東京都・高尾山で開催	5
朝日連峰に「朝日軍道」の痕跡を探る	6
山の名著再読	8
連載 ■ ご当地アルプス登山案内	
函琴浦アルプス	10
函荊田アルプス	11
東西南北	13
活動報告 図書委員会	14
支部だより 栃木支部	15
新入会員	16
図書紹介	17
会務報告	18
ルーム日誌	18
会員異動	19
INFORMATION	19
編集後記	19

▶ 日本山岳会事務局(含図書室)取扱時間
月～金 …… 10～20時
第1、第3、第5土曜日 …… 10～18時
第2、第4土曜日 …… 閉室

かつてウィーンでの国際学会に参加した際、休みの日にヴィルダーカイザーの岩壁を見物に行ったことがある。また、国境の北のドイツにも何度か訪れているので、このあたりは知らない土地ではない。コロナ禍の後で行く旅行としては日程が長過ぎるという家族の意見もあったが、3週間程度に収めることで折り合って、出かけることにした。

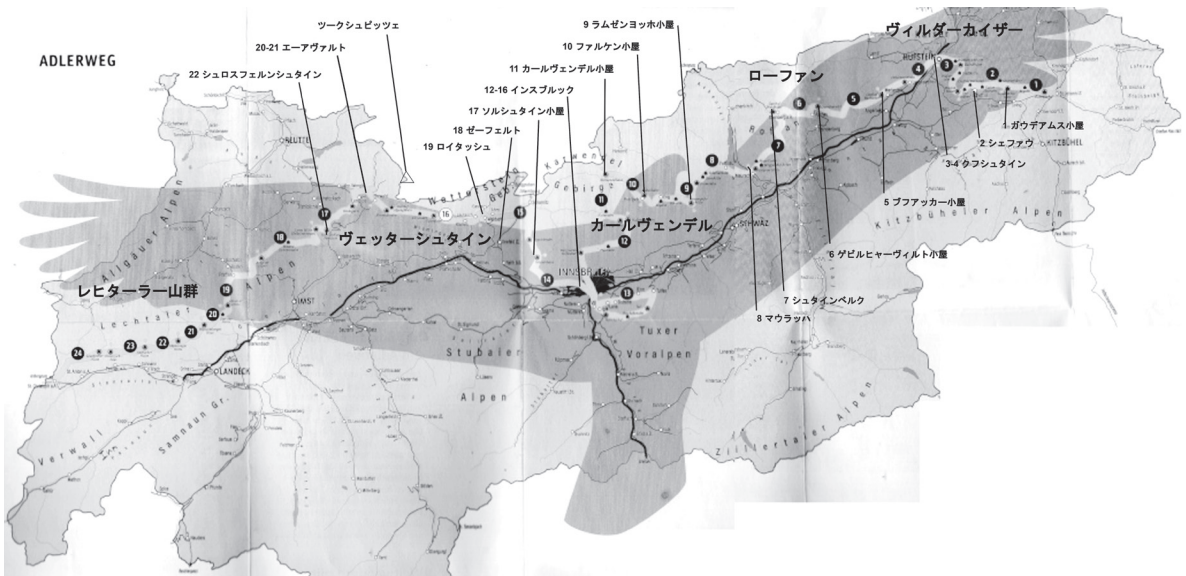
ヴィルダーカイザー (1日目ー4日目)

日本を8月22日に出発し、翌朝到着したミュンヘンの空港から汽車に乗ってチロルの東端にあるザンクト・ヨハンまで移動した。ここは有名なキッツビューエルの隣町で、町の北の平原の向こうにヴ

イルダーカイザーの山々が見える。1日目は早朝、ザンクト・ヨハンを出発、北に向かって平らな道を1時間ほど進むと、いよいよ登りにかかる。この山群は大体2300mぐらいの所にピークを持ち、高度差数百mの岩壁を連ねた山々だが、道はその岩壁の下、森林帯のいちばん上あたりを横切るように進んでゆく。朝早く出たお陰で、3時ごろには初日の宿泊先ガウデアムス・ヒュッテに着いた。

2日目はさらに岩壁下を横切る道をたどり、シェファウという町に下る。案内所で宿を紹介してもらったが、中心近くでは部屋が取れず、かなり離れた場所のホテルしか空いてなかった。

3日目は、ヴィルダーカイザーのほぼ西端を横切るように南側か



チロルの驚の道。地図の背景には両翼を広げた鷲の形が示されている。白い太線がルート、宿泊地名の先頭の数字は実際の行動日

ら尾根を登って北側に下り、さらに北西に向かってクフシュタインまで降りた。ここはかなり大きな町で、買った物などでもう1泊した。

ローファン（5日目―8日目）

5日目からは2番目の山群であるローファンの領域。ここまではすばらしい晴天が続いたが、どうやら悪天候の期間に入ったよう。朝から雨が降る。クフシュタインから車で1駅行って登りにかかる。途中の小屋で休憩の後、午後小雨の中を緩やかな登り降りを繰り返してブファッカー小屋まで。小屋の周辺は牛を飼う牧場だ。

6日目は雨が少し上がり、牧場が続く中をさらに進む。この日の目的地はカイザーハウスとなっていたが、そこはテーマパークみたいな場所、観光客で大にぎわいしていてトレッキングには近寄りたくない。別の案内では、少し先にグヴェルヒャービルトという所に泊まるようになっていて。こちらは農家が小屋を兼業しているよう、この日泊まったのは私1人だった。

7日目はほぼ一日中シュタインベルガー・アツヒエという川に沿った斜面の道。上り下りは少なく、距離も15kmほどで早めに目的地のシュタインベルク・アム・ローファンに着いた。ここも宿を取るのが難しく、結局アパートの一室みたいな所に泊まったが、食事には2kmぐらい離れた村の中心まで歩かねばならなかった。

ここまではずっと森林帯の中で高低差もあまりなかったが、8日目はいいよこの山群の中心である、ローファンの尾根を越える行程である。この日の道は分かりにくく、朝6時に出発したが1時間も登った後でルートを間違えなかったかを確認するために出発点ま

で戻ったりして、やたらに時間がかかった。それでもピークを目指して雨の中を登り続け、お昼過ぎに稜線に到達した。そこから峠を越えて南側のエアフルター小屋まで行くと、下の町からのロープウェイが架かっている。これを使って夕方、マウラッハの町に着いた。後で調べたところ、この日に通ったルートはガイドブックのものは全く違っていた。出発から間もなく大きく西にずれた方向へ進んでしまい、本道とは全く別の尾根を頂上に向かって登っている。だいぶ遠回りをして峠の所で正しいルートに合流したらしい。

カールヴェンデル（9日目―12日



ローファンのシュタインベルク・アム・ローファン（石の門）



ファルケン小屋付近から見たラーデラーの大岩壁

目)とインスブルック(13日目―17日目)

マウラッハは南北に細長いアッヘンゼー(湖)の南の端にあり、そこから先はカールヴェンデル山群である。9日目は湖岸に沿ってしばらく北に行き、その後、南西に向かつて開けた大きな谷を登る。谷の勾配が緩い間は牧場が続いているが、やがて谷は終わり、山の稜線に向かつて急な登りが始まる。傾斜はきつくなるが困難な所はない。2時間半ほど登って出た峠の向こう側にラムゼンヨッホ小屋があった。石造りの2階建てで、古風な感じが良い。湖からは1000 m程度の登りである。

10日目は峠の下の岩壁帯のトラ

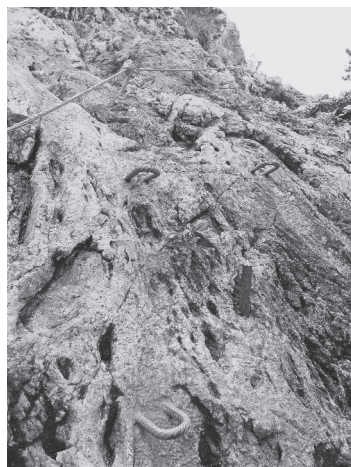
パスで始まるが、その後は下りになり、開けた谷を西方に向かつて進む。この谷の特に右手の方は傾斜が緩い。一方、左手にはさほど遠くない所に山々の北側の岩壁が連なっている。いちばん目立つのはラーデラーの北壁でほとんど垂直に見え、高度差も500 m以上ある立派なものだ。ファルケン小屋に着くと、すでに到着した客たちでいっぱい、皆ビールや食べ物を取ってくつろいでいた。

翌日も同じようにほぼ西へ向かう。上り下りはあまり多くなく、緩やかな斜面をトラパスぎみに進む。最後はかなりの幅の広い自動車道路に出た。これをたどって行くと、行き止まりの所にカールヴェンデルハウスという大きな小屋があった。この小屋からの道は、スチールワイヤが固定してあるヴィア・フェラータになっている。明日の早い時間に通らなければならないので、空身でその区間を通ってみた。傾斜はきついし、困難な箇所が連続している。しかし、ワイヤとホルド用の金具が設置されており、しつかり捕まって移動する分には危険は感じない。

12日目は行程のいちばん長い日

なので、薄明るくなった午前6時に小屋を出発する。急峻な岩壁帯は前日の練習のお陰で、薄暗い中でも20分ほどで通過できた。そこから先は傾斜の緩いシュラウフカールという谷で、ガレ場の登りが続く。稜線に近づくと傾斜が急になり、ルートの選び方が複雑になる。急坂を上り詰めると峠に出た。時に10時半、今日の長丁場を踏破するのに十分な速さだ。しかし、峠からこの先のルートを見ると、初めにかんがりの急坂を下らなければならぬが、そこにはロープなどは設置されていない。このルートは、単独行の私には危険が大き過ぎると思った。

峠から先へ行かないと、カールヴェンデルのうち最後の1日半の部分がカットされてしまう。しかし、安全に確信が持てないのに進むわけにもいかない。結局これより先は断念し、代わりに峠から左の稜線をとどつてビルクカールシュピッツェ(2749 m)に登る。この登路にも所々ワイヤロープが張つてあるが、端がきちんと固定されていない場所が



カールヴェンデル小屋裏から始まる、ヴィア・フェラータのあるルート

あるなど、ドロミテの場合のように非常にしつかり設置されているとは感じられない。

来た道を峠から小屋まで戻り、ひと休みしてからさらに下つてシヤルニッツという町に下つた。案内所に行つて宿を聞いたが、今日はどこも満員だと言う。どこか別の町に行つて泊まれる所を探さなければならぬが、このあたりは小さな町ばかりで、どこかで泊まれるかは分からない。考えた結果、この区間の最終到着地であるインスブルックに鉄道で行くことにした。ここはチロルの中心の大都市で、ホテルもたくさんあるから、どこかには泊まれるだろう。

結果としてインスブルックには5泊した。長期滞在した主な理由は、ここにオーストリア山岳会の本部があり、そこに3日通つた



シュラウフカールザッテル (峠) からビルクカールシュピッツェへの登り

めである。ローファンでルートを大きく間違えた原因は、購入した地図のソフトを使いこなせなかったためで、発行元の山岳会で正しい使い方を教わる必要があった。

ヴェッターシュタインとツークシュピッツェ (18日目―23日目)

9月9日(18日目)、インスブルックを出発しヴェッターシュタインに向かう。好天期間が終了したようで朝から雨が降っているが、旅行期間が少なくなっているのが、天気待ちをする余裕はない。この日は雨の中を林間の登山道を5時間ほど登り、ソルシュタイン小屋に着いた。19日目は急な沢を横切る所が2ヶ所あったが、ほかは穏

やかな道で、4時間ほど歩いて鉄道の駅に着いた。

ここから3日間は、チロールでも屈指の観光の中心地であるゼーフェルト、ロイタツシュ、エーアヴァルトの順に泊まる。どこも混んでいて宿を取るのもかなり苦労だったが、それぞれ魅力的な町で、泊まっただけの意味があった。ロイタツシュまでは雨が続いたが、21日目にエーアヴァルトに向かう途中から晴れた。

もう帰国の日が迫っており、この先にあるレヒターラー山群を含む驚の道全体を踏破することは不可能である。この最後の好天期間をうまく使いたいと考えて、ツークシュピッツェに登ることにした。この山はオーストリアとドイツの国境にあって、標高2950mでドイツ国内の最高峰。巨大な岩峰で一般者が登れる登山道はないが、ドイツ側とオーストリア側からそれぞれロープウェイが設置されているので頂上まで行ける。

9月13日、エーアヴァルトの外れにある出発点(標高1225m)に行き、そこからロープウェイに乗ってわずか10分で高度差1725mの頂上に着いた。頂上は巨大

な建物に覆われており、中には2つのロープウェイ駅と、大きな食堂や博物館、お土産屋などが入っている。建物の屋上からは360度のパノラマが広がり、北チロールの山々はもちろん、南方にはグロースグロックナーやシュトゥバイ山群、さらにマルモラーダなどドロミテの山も遠望できる。

晴れの天気は、翌23日まで続いた。その後はまた雨になる予報なので、この日でトレッキングを終わることにし、フェルンシュタインゼーという湖に面しているホテルまで行つて泊まった。ここは元お城だった所で、とても景色が良く、また交通の要衝でもある。翌日はバスを乗り継いで驚の道の終了点であるアールベルクのザンクト・アントンまで行つたが、雨で山は全く見えなかった。

トレッキングを終えて

今回いちばんの心配は、コロナがどう影響するかであった。しかし、ヨーロッパでは日本に比べれば規制は緩やかであり、入国の際にワクチン接種の証明書も要求されなかった。旅行中もコロナのことを忘れて過ごせた。

一方、スマホに関連した不具合がいろいろ起こった。まず、日本で買っておいたSIMカードが全く機能せず、トレッキング開始後すぐ買い替える羽目になった。また、ルートを見るために記録するためのソフトがローファンで経験したようにうまく使えず、その解決のためにインスブルックでオーストリア山岳会の本部に日参することになった。

今回のルートがこれまでの3回と全く違うのは、歩いている人の大半が地元のアールストリアまたはドイツから来ているという点である。どこでもドイツ語をしゃべる人ばかりで、英語があまり通じないのにはびっくりした。山小屋は昔風のことも多く、カードでの支払いは受け付けないとか、WiFiの設備がなく、携帯の電波も届かないといったことがある。

ルート自体については、困難な場所でもワイヤロープや鉄釘などが万全に設置されているとは限らない。チロールでは、山に入る人たちにレベル以上の技量や経験を要求しているのかもしれない。こういった点も覚悟しておくことが必要だ。

REPORT

2023年度 自然保護全国集会を
東京都・高尾山で開催

自然保護委員会委員長 下野綾子

今年度の自然保護全国集会は、自然保護委員会と高尾の森づくりの会との共催で「人と森のかかわり」をテーマに10月21・22日に行なった。初日はタカオネ（八王子市高尾町）のホールで、哲学者・内山節氏による基調講演と各支部の報告を行ない、翌日は高尾の森づくりの会の裏高尾フィールドを見学した。11支部が参加し、YOUTH CLUB3名・子どもと登山委員会1名の協力と合わせて、参加者は合計44名だった。加えて高尾の森づくりの会会員20名ほどにフィールドのサポートをしていただいた。

内山節氏は、そのままの自然を受け入れ、共に生きるという姿勢をお持ちである。内山氏が信仰しておられる修験道は、山を神仏として捉え、山頂は神が宿る聖域とみなしている。その姿勢は、山頂を制覇するという欧米登山のスタイルとは相反するものだ。昔の日本の社会は、自然を神仏が宿る清

浄な世界と捉え、祭事を通じて自然からの許しを得て、人は自然の代理人として、自治を行なっていた。そうした日本人の自然観は、欧米スタイルの広がりとともに忘れられている。今こそ昔のように自然との関わりを取り戻すときなのではないか、と語られていた。

高尾の森づくりの会は、多様で豊かな森林を復元することを目標に、針広混交林を増やしていくよう植樹を行なってきた。加えて自動撮影カメラを設置し、動物調査を行なっている。その情報はビクター・センターや大学などにも提供している。

北海道支部は、北海道環境生活部から委託を受けて行なっている大雪山高山植物盗掘防止パトロール、美瑛富士避難小屋の携帯トイレ・ブースの点検・清掃活動について報告された。

宮城支部は、宮城県の山地や丘陵における風力発電事業計画の概要について紹介された。自然環境

への悪影響が大きいことから、自然保護委員会として対応の必要性が述べられた。

東京多摩支部は、「身近な水環境の全国一斉調査」に参加して行なっている水質調査、山梨支部と連携して行なっている三ツ峠山アツモリソウ保護活動、自然観察会や自然保護講演会について報告された。また、東京都から野火止水水歴史環境保全地域を借用して活動を開始したことが報告された。

群馬支部は、これまで行なってきた自然観察会として、湯ノ丸山登山とミヤマシロチョウ観察会、赤城山フラワー・トレッキング、榛名・天目山登山と沼ノ原自然観察会について報告された。

山梨支部は、三ツ峠山アツモリソウ保護活動に加え、山梨県における高山植物の現状やニホンジカの管理計画について紹介された。実際に南アルプスや檜形山におけるニホンジカによる植生影響が報告された。

越後支部は、弥彦山における外来種駆除活動、清掃登山や植生管理作業、外来種への理解を促すための学習会の開催について報告された。

関西支部は、「本山寺山森林づくりの会」での活動、六甲山・東おたふく山でのススキ草原復元活動への参画、やまみち巡視保全活動や自然観察会について報告された。

北九州支部は、平尾台での外来植物除去作業や絶滅危惧種の保護監視活動、英彦山や九重山での清掃登山およびバイオ・トイレの清掃活動、九州森林管理局から委嘱を受け森林保全巡視員として巡視活動を行なっていることが報告された。

本部は、東北大学が代表機関を務める「ネイチャーポジティブ成長社会実現拠点」に参画したことを報告した。この拠点は、科学技術振興機構が支援しており、産官学民が協働して生物多様性の自治管理や持続可能な利活用を実現することを目指している。

その他、福井支部・東海支部・四国支部・熊本支部・宮崎支部からは、支部報告を送ってもらった。集会は4年ぶりの開催となったが、顔を見合わせて情報交換をすることの重要性、日本全国に支部がある日本山岳会であるからこそできる保全活動の必要性について再認識する機会となった。

創立120周年記念事業■全国山岳古道調査報告

朝日連峰に「朝日軍道」の痕跡を探る

松本博子

最も調査困難な古道の一つ

9月15日から5日間かけて、平日クラブの女性5名と男性2名とで、朝日連峰・大鳥池から長井葉山へと縦走した。創立120周年記念プロジェクトのうちの「山岳古道120選」の一つに、PJ監修者からの推薦により選ばれた「朝日軍道」調査のためである。最も調査困難な古道の一つとされ、調査主体は本部に任せられ、平日クラブが担当することに。私が古道PJの裏方仕事を務めている関係から、文献調査や地元山岳会との連絡係のために、リーダーを引き受けることとなった。いくつもの困難はあったが、柔軟に受け流せる女性陣およびサポートに徹してくれた男性陣の協力で、49歳から65歳の7名により無事に調査できた。

軍用道路である。山形県長井市草岡・葉山・中沢峰・御影森山・大朝日岳・以東岳・オツボ峰・戸立山・茶畑山・柴倉山・鶴岡市鱒淵を通る、全長65kmのその道は、ほとんどが朝日連峰の稜線を通っている。関ヶ原の戦いに際し、山形において徳川方であった最上家・伊達家などと豊臣方の上杉家との対決が決定的になり、慶長出羽合戦が始まった折に、上杉家では実際にこの道路を使い、庄内へ軍勢を進めている。合戦は上杉方が優勢だったが、関ヶ原で豊臣方が敗れたことで戦後、上杉家は庄内の飛び地を失い、わずか数年で軍道はその役割を終えていたという（本会報776号の木村喜代志氏の文章を参照）。

420年前の道で、このようにわずかな期間しか使われていない雪深い山道が、どれほど残っているかという点に興味をそそられた。ただ、オツボ峰の北方にある三角峰から北は笹ヤブに埋もれて通行不能と分かっていたため、調査は



狐穴小屋を振り返る。以東岳(右端)の手前に電光型の道跡が見える

それ以外の部分を対象にした。

避難小屋4泊の縦走は未経験のメンバーも多いので、計画段階で意見を出し合い、共同装備で少しでも荷物を軽くする工夫をした。当初は長井葉山から入って大鳥池へ抜ける3泊で計画したが、葉山山荘・大朝日岳避難小屋間のコースタイムが10時間を超えること、および初日の葉山まで上がる登山道が昨年8月の土石流で崩れて以降、刈払いもされていないという情報が入ったため、逆コースがとられた。それでも3泊ではきつい、金曜日から火曜日までの4泊へと変更され、その結果、仕事を休めず1名は不参加に、さらに



朝日連峰主稜線に沿って大朝日岳を目指す。北寒江山・寒江山間にて

2名は3泊で途中の大朝日岳から朝日鉱泉への下山となった。地元朝日連峰山岳会に電話してご挨拶したところ、ちょうど刈払い直後で、宿泊予定の避難小屋で水は確保できると言われ、ひと安心。

お天気フルコースを体験

夏から秋への季節の変わり目に当たってしまい、秋雨前線が東北地方の南北を右往左往して天気が安定せず、中日は晴れたが濃霧で斜面が見えず古道の痕跡発見不能の日もあり、10mを超える北西風と雨で視界も利かず、飛ばされそうになる日もあった。でも、そこは女性ならではのポジティブ思考



中沢峰の先、御殿御小屋の平場にある朝日軍道や卯の花清水のプレート

で「本当はすばらしい笹原と眺望が広がっている」と空想したり、晴れ間が出ると、すかさず濡れの雨具を風になびかせ、乾かしながら進んだりして乗り切った。

2名が大朝日岳から朝日鉱泉へ下山した後の4日目の行程は最も距離が長く、途中には刈払い直後の道も含まれ、樹林帯のアップダウンが続く。とにかく足だけは交互に前へ動かすようにして、日没からほどなくしてなんとか葉山山荘に到着できた。ようやく訪れた最終日。葉山神社奥の院から飯豊連峰や蔵王連峰を望めたが、急激な天候変化で雷雨に。地元山岳会への電話では、一般の登山者は大

変だが通行可能と言われていたため、土石流で崩れた箇所を高巻きしたり徒渉したりしながら下った。里へ出たらカンカン照りの猛暑となっていて、お天気のフルコースを経験したね、と皆で笑い合った。

朝日連峰は水量豊富で、地元の情報でも泊まる予定の避難小屋で水は確保できると聞いていたが、今夏は降雨が少なく道程上の水場が不明なため、次の小屋までの水になるべく持つようにした。ところが、4日目は給水予定の水場(御殿御小屋・卯の花清水)をあちこち探したが見つからず、葉山山荘まで残り3時間の行程を各人500mlに満たない水で進む事態となった。その時点で、夕食に使う水を往復15分の水場へ汲みに行くのに暗くては危ないと判断して、早く歩ける2名が先を急いだ。地元山岳会からの水場情報と、軽量化目的で最低限の水で歩行した、兼ね合いの難しさも経験した。

稜線上を吹き渡る風と適度な雲で暑くも寒くもなかったが、食事が喉を通りにくい日もあった。食当の峠原会員が毎日作る料理は匂いから食欲をそそり、皆が持参したおつまみと相まって、歓談しな

から食べる夕食が、今でも楽しかったシーンとしてよみがえる。

*マッシュポテト・インド風(カルビーのマッシュポテトにお湯を入れてよく混ぜ、マヨネーズ、チャットマサラを入れる) *切り干し大根のサラダ(3倍の水で戻し、湯で戻したドライ・トマトとレーズンも混ぜてオリーブオイル・塩・胡椒で調味) *海藻サラダ(水で戻し、コーン入りシーチキン、蒸しキヌア、スライス・アーモンド、レモン風味オリーブオイル、バルサミコ酢、塩・胡椒を入れて混ぜる) ほか、紙面の制限で紹介できないのが残念。

かすかに残る軍道の痕跡

朝日軍道の痕跡と考えられるのは、三角峰からオツボ峰にかけてと狐穴小屋周辺における斜面の開削と、石を敷き詰めた一間幅の道。笹原の緑の濃淡が電光型の道跡を示す箇所としては、三方境から以東岳方面を望んだときの中間南東斜面で確認できた。諸記録ではほかの箇所にもあるのだが、通過時に濃霧で分からず残念。また、オケサ堀付近ではつづら折りの良好な道が残り、軍道の地点を示す看

板もある。三角峰付近の水場と卯の花清水には50人程度が休憩できそうな、やや広い平場があったが、地元山岳会によると金玉水への分岐周辺も平場であるとのこと。420年前の軍勢の様子が、ふとよみがえってくるような気がする場所だった。逆に以東岳山頂近くの岩場の狭い道では、馬や荷駄が通り抜けできただろうかという疑問が沸き上がり、歩きながら議論していた。古道の痕跡を見渡せるような天氣が少なかったのは残念だが、厳しい気候の場所を体感できて、軍道に思いを馳せられた5日間となった。

準備段階で朝日連峰周辺の3つの山岳会に登山道、水場、軍道の痕跡箇所の位置を問い合わせ、とても助けとなった。また、山行中も登山道の草刈りをしている大鳥小屋関係者や大朝日小屋の管理人から貴重な情報を得られた。御影森山・中沢峰間は長井山岳会による草刈りがなされており、これがなければヤブこぎとなり、葉山山荘にたどり着くことは困難だったと思う。この場を借りて、関係の方々に御礼申し上げたい。

(平日クラブ会員)

連載■文庫本でも楽しめる

山の名著再読

(5)『マッターホルン北壁』(小西政継著・山と溪谷社)

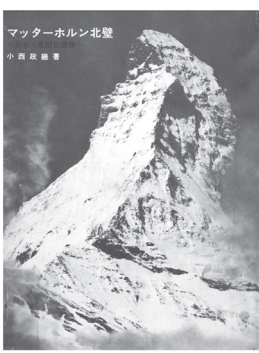
小泉 弘

もう56年前になるのに、この冬期マッターホルン北壁登攀は今もはつきりと覚えている。登山界の一部に流れた空気の濃みも……。

本書は申すまでもなく日本人初の冬期北壁登攀記であるが、もう一つの柱は著者の長年にわたる準備や勉強の著述にある。

序章の「北壁との闘い」は、18世紀に始まったアルプスの登山の歴史から、冬期マッターホルン北壁の試登と初登攀までの歩みを詳しく記している。

続く「山への憧れ」では、山登りも知らない油絵に熱中していた少年が、山岳雑誌の会員募集広告を



昭和43 (1968) 年初版発行

見て山岳会に入会し、岩登りに夢中になり、冬の登攀で鍛えられ、やがて海外の山々を意識するまでを描く。

「北壁への準備」は、北壁の偵察と登頂後の下山ルート確保のために登ったヘルンリ稜で、3日間の計画が倍の6日を要し、覚悟以上に厳しい冬のマッターホルンの様子が詳細に綴られる。

「岩と氷と寒気との闘い」の章が本書の核心となる。難関のトラバース・ルートに入る3700mの地点で最初のビバークに入り、外したアイゼンを一瞬にして闇の底に落としてしまう。アイゼンなしで凍てついた北壁を登り、偵察で苦闘したヘルンリ稜を下れるであろうか。北壁の核心部との闘いの前にして著者の長い逡巡。読む側も思わず緊張する。以後3日間アイゼンなしで北壁を完登し、さらに2日間かけてヘルンリ稜を下り

切った鍛え上げた登攀技術と何よりも強靱な精神力には心底驚嘆する。ツエルマットに無事下山して、登攀記は本書の3分の2ほどの頁で終わるが、後半にもう一つの柱が控えている。

海外の山々に憧れ、国内の冬期登攀で己を鍛えている最中に胃潰瘍、十二指腸潰瘍に倒れ、さらに手術後の無理から腰を痛めて2年間、山行を諦めざるを得なくなるが、この間に著者は海外の山々の文献を辞書を片手に読み始める。

本書中、各所で詳細に書かれるヒマラヤやアルプスにおける世界の先鋭たちによる登攀の進歩の歩みと、著者の中に芽生える激しく先鋭なアルピニズムへの思考は、この長年の読書経験から生み出されたものである。

終章の「鉄の時代への進展」は、本書のもう一つの核心である。

1960年代当時の我が国登山界の後進性を嘆き、海外登山界の第一線レベルとの意識や実力とのあまりの差、夏のアルプスの壁に登って嬉々とする我が国の一流とされたクライマーたちの意識の低さを嘆く。自分たちの冬期マッターホルン北壁計画を、「夏のアル

プスを登ってもいいのに、何が冬のアルプスだ」「思いがりも甚だしい」と嘲笑した当時の我が国登山界の一部の人たちの言葉を、筆者も覚えていて。

この冬期マッターホルン北壁日本人初登以降、著者の登山姿勢と思考はいっそう熱くシャープなものになっていく。日本山岳会エベレスト登山隊の南西壁隊リーダーに招かれ、活躍の世界は広がり、登山界を牽引する存在となっていくが、それは本書以降の話である。

「あとがき」で著者は、装丁・レイアウト全てを熱心に担当してくれた編集者I氏に深謝している。函入り角背上製本の造本装丁は細部まで心配りが大変すばらしい。加えて両面にルート図が印刷されたハガキ大の葉が挟み込まれているが、登攀を詳細に語る本文のすぐ横にこれを置いて読み進められるこの配慮も実に好ましい。外函の刷り色や文字の扱いなど、刊行から55年経った今見てもI氏の滲み出るセンスが素敵である。

文庫版は、ヤマケイ文庫(2013年初版発行、税込み968円)で読むことができる。

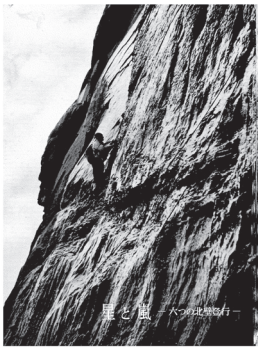
(図書委員会委員)

(6)『星と嵐』(ガストン・レビュファ著／白水社)

飯田年穂

本書(近藤等訳、1955年)は、ヨーロッパ・アルプスで最も難しいと言われたグランド・ジョラス、ピッツ・バディレ、ドリユ、マッターホルン、チマ・グランデ・デ・ラヴァレド、アイガーの各北壁の登攀記を収録している。著者ガストン・レビュファ(1921〜85)はフランス人で高山ガイドだ。美しい詩情あふれる文章でアルプスのクライミングを描いた作品を多く残した。

フランスといえは、1950年にアンナプルナー峰の頂上を極め、人類初の8000m峰登頂を達成したニュースが世界を沸かせた。彼も隊員の一人だったが、その後は国家事業としての登山に加わることは二度となかった。53年には英国隊がエベレスト完登に成功。



昭和30 (1955)年初版発行

日本も56年にマナスル初登頂を成し遂げている。マナスルは、ようやく戦争の惨禍から立ち直ろうとしていた日本にとって、人々に元気を与える出来事だった。経済成長に伴って生活も潤い余暇を楽しむ余裕も生まれて登山ブームが到来、55年に世に出た近藤等氏による訳書は大好評を博す。

そんな時代の空気が息づいていたなかで、山好きの愛読書となったレビュファの作品は次々と出版され、映画も上映される。そこで目にしたレビュファの姿は、当時の山男たちの意表をついた。愛用のウェアはジャガードのセーター。その赤い織模様がアルプスの真っ青な空に映えて、輝く岩の光を浴びて躍る。汚い、ダサい、が当たり前の日本の登山界にとって、そのスタイルはまさに衝撃だった。それは、同じアルプスを登っていたドイツやイギリスの登山者と比べても異彩を放っていた。彼には確かに差異化するセンスがあった。しかも、その違いは外見だけにとどまっていない。

本書に取り上げられている6つの北壁のような高難度のルートは、もっぱら、当時としては最強のクライマーたちにとつての挑戦の対象になっていた。彼らは命を懸けて登る。そこには常に死の危険が待ち構えている。なかでも有名なのが、『魔の山』と恐れられたアイガーだろ。アイガー北壁は、初登頂までいくつもの試登が繰り返され、その挑戦者の多数が死んでいる。そうした死闘の末、ついにドイツ・オーストリアのパーティーが頂上に立つ。ナチス・ドイツは、死を賭して山と闘い征服した英雄として登頂者を迎えた。ヒマラヤの征服者たちに対しても、時の国家はメダルを贈って栄誉を称えている。エベレストの場合は貴族に列せられた。

登山は山との闘いだと思える人は多い。だが、『星と嵐』で語られる登山が表現するものとは、征服や死を売り物にする闘争的な登山とは違った、山と自然への慈しみや敬意であり、登る仲間との共感、そして自由に登ることの楽しさだ。ここでは、どんなに手強い岩壁でも荒れ狂う嵐も、闘う敵とは見ていない。3日かけて登ったアイガ

ー北壁を終えて、この「三日間、わたしたちは障害、寒気、嵐など、人間に刃向かうものにしか遭遇しなかった」と振り返る。しかし、その体験自体が「大自然の諸要素」と交わり一心同体になることであり、『嵐』さえ登攀をいっそう充実させてくれるもの、『星』の瞬きと同じ「山がたえず差し出してくれる数限りないよろこび」の一つなのだ。それを発見できたことが幸せな登攀の証だ。

レビュファは、本書の最初で「ある日、山で生きようと覚悟をきめて、わたしはガイドになった」と述べている。お客を案内して登る「ガイド」は自分のために登るのではない。庭師がその庭園の柵を開くように、彼の山々の扉を開くのだ。それは未知へと開かれた扉だ。その向こうに、思いもかけぬ光景が待っている。その発見こそが登ることの喜びなのだ。本書を道連れに尽きせぬ山の喜びの発見へと、いざなわれ、自分自身の登山を見つけてみたい。

文庫版は、ヤマケイ文庫(2011年初版発行、税込み990円)で読むことができる

連載■ご当地アルプス登山案内 45

琴浦アルプス

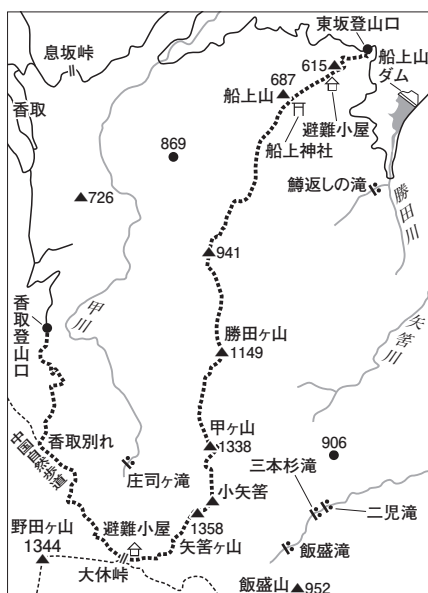
「琴浦アルプス」は大山北部に位置し、大山山系の支脈の山々である。その下山地点（出発地点）となる船上山（せんじょうさん）（687m）は南北朝時代後醍醐天皇が隠岐を脱出した後、御座所を遷し、鎌倉幕府を打倒した地として歴史の表舞台に登場してくる。山容は東・西・北を險しい崖に囲われた、天然の要塞である。

は崩落のため縦走禁止となっており、歩けるのは船上山→ユートピアまでとなる。琴浦アルプスは、その間の船上山→大休峠のルートを言う。

琴浦アルプスは往復するには困

船→神社の左手に「大山縦走路入口」の道標がある。かつては、船上山→大休峠→ユートピア→剣ヶ峰→大山頂上(弥山)まで縦走できたが、今は象ヶ鼻→大山頂上の間

点に車を配置する必要がある。大休峠に向かうには国道9号から県道54号に入り、大山方面に南下する。右側に香取開拓農協購買部（かとり）を通過したら、およそ10分後に香取登山口が左手に見える。道路脇に5台程度駐車可能である。一方、船上神社に向かうには香取開拓農協



購買部交差点を県道30号に入り、東へ向かうと東坂登山口（船上山登山口展望駐車場）がある。駐車場は整備されており、10台は駐車可能である。

なお、琴浦アルプスは、香取登山

山陰支部 伊澤寿高

口駐車場から東坂登山口駐車場まで、余裕を見て8時間以上の計算が必要なロングコースで、健脚向きのコースである。



琴浦アルプスのスタート地点となる大休峠

【コースガイド】

香取登山口から大休峠に向けて道は整備されており、快適に歩ける。ブナ林の中を緩やかに登ると「香取別れ」で、かつての大山参りの古道の一部を通る中国自然歩道に入る。１時間３０分ほどの登りである。

琴浦アルプスのスタート地点である大休峠に着く。ここから先、大休峠↗矢筈ヶ山↘小矢筈↗甲ヶ山↘船上山神社の間が、いわゆる琴浦アルプスである。

大休峠の十字路を、避難小屋入り口側から北に向け矢筈ヶ山に向かう。急登と緩傾斜をこなしながら1時間で矢筈ヶ山(1358m)



甲冑武者を思わせる、いかつい山容の甲ヶ山

保が難しい岩場を通過して小矢筈に至る。ここから甲ヶ山までも途中に岩場のトラバースや、階段状の岩場に取り付く場面もあり、矢筈ヶ山から1時間20分かけて甲ヶ山山頂に着く。

山頂からの下りは、「ゴジラの背」と呼ばれる幅の狭い岩稜地帯を細心の注意を払いながら下ると、延々2時間の長いヤブこぎが始まる。疲れ果てたところ、ひよっこりと船上神社の屋根が見える。船上神社の鳥居をくぐり左手に折れると、やがて船上山行宮碑(後醍醐天皇が船上山行在の折、野立てをされたと言われる場所)と避難小屋を右手に見ながら東坂登山口駐車



屏風岩と呼ばれる険しい岩壁を巡らせる船上山

場まで40分で見学。



昭和9年、船上山史跡保存会によって再建された船上神社本殿

【コースタイム】 香取登山口(1時間25分) 大休峠(1時間) 矢筈ヶ山(1時間20分) 甲ヶ山(2時間) 船上山(40分) 東坂登山口

【交通アクセス】 日本交通香取線、ことうらバス船上山線が利用できるが、いずれも登山口までのアプローチが徒歩30分以上と長いので、2台のマイカーを利用するのがベスト。

【参考文献・地図】 日本海新聞「とつとりお城探訪」② 船上山(琴浦町)「行宮跡はどこに？」(琴浦町教育委員会 野口良也) 山と高原地図55「大山・蒜山高原」(昭文社)

連載■ご当地アルプス登山案内 46 荻田アルプス

北九州支部長 竹本正幸

荻田^{かんだ}町は周防灘に面して発展した臨海工業都市で、国の重要港湾に指定されており、陸・海・空の交通ネットワークが充実している。また、1000年の歴史を持つ修験道の等覚寺^{とくさくじまづえ}松会(国指定重要無形民俗文化財)や荻田山笠(県指定



行橋市長尾付近から見た荻田アルプス9座のパノラマ。左端が高城山

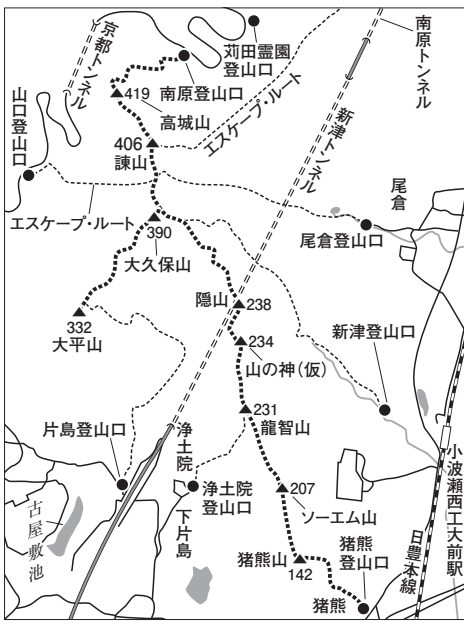
無形民俗文化財)は500年の伝統がある。そのほか農村景観百選に選ばれた棚田や九州最大最古の古墳群があり、歴史や文化、自然、産業面で独自性を誇っている。

「荻田アルプス」は荻田町の西側に位置し、平尾台カルスト地帯の東側になる。北から高城山^{たかしろやま}、諫山^{いさやま}、大久保山^{おおくぼやま}、太平山^{たいへい}、隠山^{かくやま}、山の神^{やまのかみ}、龍智山^{りゅうちやま}、ソーエム山^{そーえむやま}、猪熊山^{いのくまやま}の全9座が荻田アルプスである。このうち高城山、諫山、大久保山、太平山の4座を「荻田アルプス」、残りの5座を「おはせ里山5連峰」と分けて呼ぶ場合もある。

全行程約9kmで、低山ではあるが登りごたえのある縦走になる。今回は猪熊山から高城山の全9座を紹介する。

【コースガイド】

JR日豊本線・小波瀬西工大前駅から南に向かつて線路沿いに進む。駅から20分ほどで猪熊公民館に到着するが、ここが猪熊登山口になる。



清^{すが}地神社への階段を登り、正面の鳥居をくぐつて神社に着く。本殿の左より登山道に入る。かなりの急登で、ロープを頼りながら登り切った所に巨樹のシンボル・ツリーがある。その先には最初の鉄塔があり、さらに登ると猪熊山。こゝは迷いやすい所で、右に曲がり北へ向かう。途中、岩室状の大きな穴がある。これは古墳の跡らしい。落ち葉を踏みしめながら進むと最初の展望休憩所がある。ここからは、臨海工業地帯や街並みが一望できる。

左に5分ほど下ると、巨岩群の中に龍智窟がある。往復10分ほどで龍智山(山城跡)に戻り、山頂より堀切のある三段坂を下る。尾根沿いを進むと「5峰中間点」の看板の真向かいに山の神がある。おぼせ里山の最後は隠山で、その先のズッコケ坂の手前に樹齢300年の「おぼせ里山桜」がある。

ズ、コケ坂をロープのお世話になりながら約25分で新津ルートに合流する。稜線に出て三叉路を左に曲がり、大平山に向かう。ここからが荀田アルプス4峰である。

さらに急坂が続き、登り切った所がソーエム山。15分ほど進むと「パワースポット」と書かれた御神木に着く。龍智山の手前の分岐を

すぐ1座目の大久保山を過ぎ、数回のアップダウンを越えて大平山手前で片島ルートに合流。大平山は山城跡で、山頂が広くて倒木を

利用した5人分のベンチもある。来た道を分岐まで引き返し、稜線を高城山へと向かう。3座目の諫山の手前で、尾倉登山口からのルートが合流する。

近は展望が良い所で、東には菊田港や北九州空港、菊田町が一望できる。西側には平尾台や竜ヶ鼻が見える。短い坂を登ると菊田アルプスの最高峰・高城山（419m）に到着。中世の山城があつた所で砦のあつた場所も確認できる。眼下に菊田町と周防灘、目を転じれば英彦山など内陸の山々の眺望が楽しめる。山頂には2つの大きな岩がどつしりと構えている。しめ縄が張られた巨岩は靈気が漂う。

菊田町岡崎の国学者・挟間畏三
 は、明治32(1899)年に出版し
 た『しないてとこう神代帝都考』で、日本書紀や古
 事記に京都郡地方の地名が出てく
 ること、遺跡や古墳が多く分布し
 ていることなどを根拠に、「天孫
てんそん降臨の地は日向の高千穂ではなく
 豊前の国、京都郡の高城山だ」と説
 いた。挟間は、高城山頂の巨岩を
きよのさかたけ「逆鉾」と呼び「高城山はタカチ
 ホ、チが濁つてチとなり中世に城
 が築かれてから城に縁のあるタカ
 ジョウとなまったものだ」と書い
 ている。

南原登山口に向かつて下山を始める。と、地元小学生の作った楽しい標語が所々にあり癒される。春は桜の名所になる「千本桜」を抜け

ると30分ほどで登山口に着く。苧田駅まではバスの便がないので、車道を歩くかタクシーとなる。

途中にある殿川ダム湖畔の県指定文化財「内尾薬師うちのおやくし」にはぜひ立ち寄りた。ダムの堰堤を渡って急な石段を登れば、石灰岩の岩山にぽっかりと穴が開いている。その洞窟の中に慈愛に満ちた、穏やかな表情の薬師如来坐像が祀られている。

なお、トイレは駅と南原登山口
 菊田霊園にある。

【コースタイム】 小波瀬西工大前
駅(20分) 猪熊登山口(25分) 猪熊山
(20分) ソーエム山(20分) 龍智山
(15分) 山の神(10分) 隠山(40分) 大
久保山(25分) 太平山(30分) 大久保
山(25分) 高城山(30分) 南原登山口
(50分) 荻田駅

【交通アクセス】 JR日豊本線・小波瀬西工大前駅より猪熊登山口まで徒歩20分／同苅田駅から南原登山口まで徒歩50分

【参考文献・地図】 苅田ガイドの会提供資料、『京築風土記』『福岡県の山』『広報かんだ』（1376号）『苅田町史』『京都郡誌』（伊藤尾四郎）、国土地理院2万5000分の1地形図「苅田」

東西南北

ティリチ・ミール北壁登攀 の報告を聞いて

芳賀孝郎

9月23日、札幌で平出和也、中島健郎両氏のティリチ・ミール北壁登攀の講演を聞いた。

ティリチ・ミール(7708m)はヒンズー・クシュ山脈の最高峰で、山脈の東部に位置している。1950年6月、ノルウェー隊が南山稜から初登頂している。日本隊としては67年、千葉県岳連隊が第3登を果たしており、さらに71年、日本山岳会石川支部隊も登頂している。

平出、中島両氏は2018年、カラコルムのシスパーレ北東壁初登攀と、19年、ラカボシの南壁からの初登攀に成功し、2回続けてピオレドール賞を受賞している。

今回のティリチ・ミール北壁登

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度をお願いします)

攀では、北壁へ入る前に難関な岩稜のコルを越えている。両手にアイスパイル、両足のアイゼン先端の爪を活かしての登攀である。強い精神力と強靱な体力、そして正確な判断力がなければ登攀は困難と思った。氷壁でのキャンプはテントを張る面積がなく、ハンモックを利用してスペースを確保するなど最先端の氷壁登攀シーンを見た。その冷静な登攀ぶりに感銘を受けた。

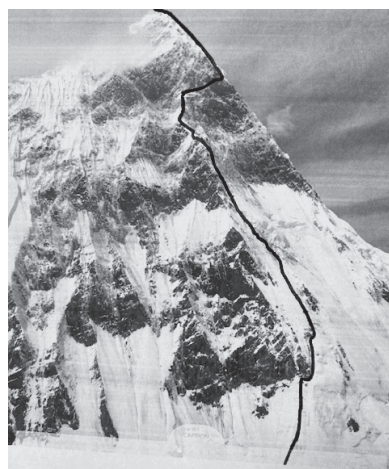
講演と画像映写が終了後、平出さんから何か質問か要望があるか、との問いがあった。

私は1958年、今から65年前、チヨゴリザ登山が終了後、チヨゴリザの登頂者・平井一正と2人、ポーター1人を連れてムズターグ・タワー(7237m)東面のピアンジェ氷河に入った。その目的は、ピアンジェ氷河の奥にあるステ・サドルに登り、中国側の

シヤクスガム方面を偵察すること、7170m峰をアルパイン・スタイルで登攀することであった。そのときムズターグ・タワーの2000m余の北東壁を仰ぎ見たことを思い出し、ぜひムズターグ・タワー北東壁を登つてもらいたい、と要望した。

ムズターグ・タワーは、当時最も登頂困難な山とされていた。54年7月、イギリス隊がムズターグ・タワーの東側を回り、北西稜から初登頂に成功した。同年、フランス隊はバルトロ氷河正面の南東稜から、イギリス隊に6日遅れて第2登した。日本隊は76年、第2次RCC隊がバルトロ氷河側正面の南西壁から登攀、7000m付近まで達したが断念している。

私は講演後帰宅すると早速、古いアルバムとフィルム・フイルを探し出した。3枚の写真をメールで中島健郎さんに送った。彼からすぐに返事が返ってきた。2012年、ロシア隊がこの岩壁に5つのキャンプを設け、17日間かけての登攀の末にこの大氷壁を突破



ムズターグ・タワー。ラインは北東壁登攀ルート(写真提供=中島健郎)

し、ピオレドールを受賞していることを知らされた。

私がムズターグ・タワーの北東壁を見たとき、いつの日かこの氷壁が登られる時代が来るだろう、と想像していた。私が見た58年から54年の歳月を経て、この北東壁の登攀が成功していることが分かった。トップクライマーたちは世界中の氷壁を目指していることを改めて認識、そして、この半世紀の登攀技術の進歩を学んだ。

平出、中島の両氏から、来年はK2南西壁登攀を目指していることを聞いた。無事成功することを祈っている。

なお、58年、ピアンジェ氷河偵察と7170m峰試登の記録と写真は、『山岳』第54年(1959年)に掲載されている。

活動報告

日本山岳会の
各委員会、同好会の
活動報告です。

図書委員会

富山の図書館・博物館巡り

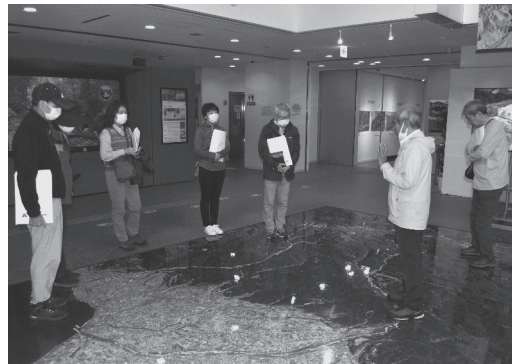
ようやく紅葉の便りが聞こえてきた10月13日・14日、図書委員会・資料映像委員会・MCCの第2回「富山の図書館・博物館巡り」に参加した。参加者は12名。巡る先は黒部市歴史民俗資料館、黒部市立図書館宇奈月図書館、富山県立山カルデラ砂防博物館、富山市大山歴史民俗資料館、富山県立山博物館、富山県立図書館と盛りだくさんである。

長野駅で9名集合、残り3名と黒部宇奈月温泉駅で合流し、うなぎ友学館（黒部市歴史民俗資料館・黒部市立図書館宇奈月図書館）へ向かう。現地から参加の飯田肇さんより「これから山岳展望コースを行います」とアナウンスがあったが、残念ながら山々は雲隠

れしていた。

黒部市民俗資料館では、日本三大奇橋・愛本刎橋（2分の1サイズ復元）の展示に、加賀藩の力と黒部川の激しさを感じた。また、「宇奈月温泉開湯100周年記念うなぎ友学館開館30周年記念」の「宇奈月温泉とともに歩んだ人々」特別展が開催中で、電源開発や鉄道敷設の背景にあったアルミニウム製造、宇奈月温泉へ引湯を実現させた技術などを学んだ。同じ館内にある黒部市立図書館宇奈月図書館では市外の方へも貸し出しを行なうなど、開かれた「山の図書館」としての役割を強調。小さいながらも地図やガイド本から絵本、漫画もあり、特に「ヤマケイ文庫は人気ですよ」とも。

黒部川流域から常願寺川流域へ移動して立山カルデラ砂防博物館へ。シアターで『立山カルデラ大



立山カルデラ砂防博物館で地学的解説を聞く

地のドラマ」を観賞。その後、飯田肇さんより地学的な面白さと砂防の必要性について解説をいただきながら館内を巡った。地学的な面白さについては「上昇する山・氷の山・火の山・水の山と4つのテーマがあり、共存しているのは世界的に珍しいのです」と語られたのが印象的だった。

時間も押し迫り、あわてて移動し、閉館ぎりぎりまで播隆上人銅像が迎える富山市大山歴史民俗資料館へ滑り込んだ。企画展は薬師岳について。映像室で大山地域の三賢人についての映画を観賞した。

2日目。8時に宿泊先のペンション愛花夢を出発、称名滝の見学

へ向かう。途中、前日に飯田肇さんより解説のあった立山火山から噴出した大火砕流でできた弥陀ヶ原と悪城の壁を見上げ確認した。称名滝展望台までたどり着いて見上げると、やはりその上はどうなっているのか？ が気になり、廻行する人の気持ちがよく分かる。予定にはなく、時間もタイトではあったが、山歩き後すぐ家路につき者にとり、称名滝を見学し地形を確認できたのは幸いだった。

急ぎ立山博物館へ。真夏に訪ねても雪の大谷をイメージできるようにと設計された白い回り階段を3階まで上がり、館長自ら解説いただいた。跡津川断層の表層を剥がして展示したコーナーや、室堂の阿弥陀如来の現われる玉殿の窟や布橋灌頂会（おぼろけかんじょう）の模型展示など、その場へ行ったかのごとく分かりやすかった。

昼食は、飯田肇さんのご推薦で「まんだら食堂」に立ち寄った。以前保育園だった場所を利用し地元の方々と運営している食堂で、名物の芦峠御膳をいただく。朱塗りのご膳には信仰の山の玄関口にふさわしく、ご接待するための料理が並び、かつつる、つぼ煮、べっ

こう、焼き付け等々、おもてなしの心のこもった郷土料理に一同舌鼓を打った。

この旅の最終目的地、富山県立図書館では、県民の生涯学習の図書館たる役割のお話ののち、資料課にて田部重治コレクションの自筆草稿や、大井冷光『立山案内』など貴重なコレクションを拝見した。また、日本山岳会永年会員であり、富山県図書館協会会長であった中島正文（『中島文庫』所蔵4500冊を寄贈）の助言により、図書館の移転先を呉羽の地に決定した経緯なども語られ、隣にある富山県埋蔵文化センターを見学し、呉羽の地の利を理解できた。

歴史、地理、文化、盛りだくさんの「富山の図書館・博物館巡り」であった。帰路の「山岳展望コース」からは夕陽に神々しく輝く剣岳など山々を眺めることができた。剣岳へははるかに遠いが、少しだけ近づけたような気がした。

学び多き2日間だった。道中会話の中にもその多くの知識を分けてくださった先輩方、旅を企画してくださった委員会の皆様に感謝申し上げます。

（本村貴子）

支部



だより

全国各地の支部から、それぞれの活動状況を、北から南へとレポートします。

栃木支部 第15回関東4支部合同懇談会報告

11月3・4日の両日、関東4支部（栃木・茨城・千葉・群馬）の合同懇談会が栃木支部主催で開催された。各支部から総勢25名が参集し、初日は「星降る学校くまの木」を会場に講演会、そして、2日目は高原山に登山した。

この懇談会は、2007年に各支部が設立されたことを記念して開催してきた。コロナ禍での中止もあったが、今回で15回目となった。懇談会のテーマは「山の日」に関連して「船村徹先生とふるさと高原山」とし、講演会と高原山登山を企画した。「山の日」が祝日となつたきっかけは、作曲家の船村徹先生が地元紙に「山の日をつくらう」という論説を発表したことだった。船村先生は本会に入会され

栃木支部に所属した。16年1月1日に、改正祝日法が施行されて「山の日」が祝日になったことの意義を、もう一度再認識しなければならない時期でもある。

11月3日、開会に当たって、地元塩谷町長・見形和久氏から歓迎の挨拶、そして高原山を「ふるさと山」として身近に感じてきた前常務理事の萩原浩司氏が「山の日」に関連した挨拶をした。記念講演では、くまの木里山応援団長であり高原山を愛する会事務局長の市川貴大氏が、船村先生の「山の日」制定に向けての取り組み、ふるさと高原山を愛する集い、星降る学校くまの木、くまの木里山応援団の活動などについて、これまでの活動と今後のビジョンについて分かりやすく説明した。その後、くまの木里山応援団の活動で整備した裏山整備の状況を全員で現地散策した。「山の日」の意義を再認識



懇談会参加メンバー。「星降る学校くまの木」にて

できるすばらしい内容であった。

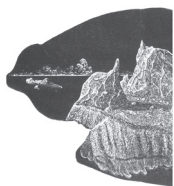
懇談会では、見形町長、市川講師も参加して、子どもたちの自然体験活動の大切さなどについて有意義な話し合いが行なわれた。会場は閉校になった伝統ある木造の教室で、そこには当時の教育目標「進んで勉強する子」「思いやりのある子」「じょうぶな子」の掲示があり、参加者各々小学生時代を思い出して自ずと背筋が伸びた。校庭には二宮金次郎像があり、ヤギが散歩しているという自然豊かな環境で、昔話に花が咲いた。

11月4日、朝食後、車に分乗して八方ヶ原大間々駐車場に移動した。ここから、高原山（釈迦ヶ岳・

図書受入報告(2023年9月～10月)

著 者	書 名	頁/サイズ	発 行 者	発行年	寄贈/購入別
ピエルドメニコ・パッカリア オ/フェデリコ・タッディ ア/猪熊隆之(日本語監修)	地球はどこまで暑くなる? : 気候をめぐる15の疑問	144p/21cm	太郎次郎社エディ タス	2023	出版社寄贈
霞会館(編)/山と溪谷社(編)	皇室と華族の登山	304p/30cm	霞会館	2023	発行者寄贈
専修大学文学部環境地 理学科(編)	山地と人間	267p/19cm	専修大学出版局	2023	出版社寄贈
岡秀郎	なぜ、あなたは、山に登るのか。: 答えはついに— 人生とつなぐ山登り原論	115p/19cm	文芸社	2023	出版社寄贈
遠藤甲太	登山史の森へ / ヤマケイ文庫	512p/15cm	山と溪谷社	2023	出版社寄贈
養老孟司	養老先生と虫 / ヤマケイ文庫	176p/15cm	山と溪谷社	2023	出版社寄贈
羽根田治	これで死ぬ: アウトドアに行く前に知っておきたい危険 の事例集	144p/19cm	山と溪谷社	2023	出版社寄贈
ネッド・フィーハリー / 木村彩(訳)	ビーストメイキング: クライマーのための保持力強 化トレーニング	224p/21cm	山と溪谷社	2023	出版社寄贈
梅沢俊	北海道の高山植物	368p/21cm	北海道新聞社	2023	出版社寄贈
竹内望/植竹淳/幸島司郎	雪と氷にすむ生きものたち: 雪氷生態学への招待	183p/21cm	丸善出版	2023	出版社寄贈
秦達夫	雲上の溪 風光の峰: 黒部源流の山々	104p/19cm	日本写真企画	2023	出版社寄贈
高知県立牧野植物園(監修) / 保谷彰彦(植物監修)	牧野富太郎の植物図鑑	176p/19cm	三才ブックス	2023	出版社寄贈
泉康子	天災か人災か? 松本雪崩裁判の真実	328p/21cm	言視舎	2023	泉康子氏寄贈
パミール・中央アジア 研究会/高橋善数(編)	タジキスタン・パミール踏査隊	58p/30cm		2023	編者寄贈
日本山岳会山陰支部	創立70周年記念誌	88p/26cm		2023	発行者寄贈
市立大町山岳博物館	年報 : 令和2年度	56p/30cm	市立大町山岳博物 館	2021	発行者寄贈
市立大町山岳博物館	年報 : 令和3年度	48p/30cm	市立大町山岳博物 館	2022	発行者寄贈
市立大町山岳博物館	年報 : 令和4年度	50p/30cm	市立大町山岳博物 館	2023	発行者寄贈
大島亮吉	漂泊者	22p/21cm	山岳展望の会	1966	田中正雄氏寄 贈
小梨里子	屋久島、そして雲ノ平へ	260p/19cm	幻冬舎	2023	出版社寄贈
戸田祐一	いくつになっても山は楽しい : 百名山をめぐる60年	212p/22cm	風詠社	2021	著者寄贈
長崎喜一	仙人記 : 夢創塾とわたしの歩み	240p/20cm	北日本新聞社	2023	著者寄贈
角幡唯介	犬橈事始 : 裸の大地 第二部	360p/20cm	集英社	2023	出版社寄贈
井上卓哉	富士を介して信を通じる : 平川義浩絵葉書コレク ションにみる富士山の姿	200p/26cm	風媒社	2023	編者寄贈
R・F・スコット/中田修(訳)	スコット 南極探検日記	466p/22cm	羽衣出版	2023	著者寄贈

回想と空想



2023年6月
白山書房
195mm×183mm 59頁
頒価2000円

回想と空想 口木版画集Ⅱ

松澤節夫木

松澤節夫著



図書紹介

題名のとおり、木口木版の画集である。まず木口木版とは何か？黄楊や椿などを輪切りに切り出し版木としたもので、表面が硬質という特質がある。密度があり目が詰まったその表面に、ビュラン（木製の持ち手の付いた鋼鉄製の彫刻刀）を用いて精密で繊細な彫りを施していく木版画である。こ

1795m）登山班と八方ヶ原トレッキング班に分かれての活動とした。すばらしい晴天に恵まれ、那須連峰や日光連山が一望のもとだ。紅葉シーズンだが、大間々から上部は樹木の葉は落ちてしまっており、これより下部の学校平付近が見ごろであった。高原山登山班は駐車場を9時に出発、八海山神社、剣ヶ峰を経て11時35分に釈迦ヶ岳に到着し、おいしい栃木米の弁当を食べながら360度のパノラマ

を楽しんだ。

下山路は往路を引き返し、14時30分に大間々駐車場で解散した。八方ヶ原トレッキング班はミツモチ周辺をゆつくりと散策し、12時に大間々にて解散した。今回の懇談会はテーマを明確にしたので、講演会・懇談会・登山活動とも有意義に実施できた。参加者の皆様のご理解とご協力の賜物である。

（栃木支部長・渡邊雄二）

の原材料である黄楊などが入手しにくく、また、版木として使用できるように研磨する作業など手間暇かかる版画の一つで、いわゆる一般的な木版画とは一線を画す。

松澤さんはもともと子どもころから絵がお好きだったらしく、50代半ばから本格的に先生について絵を習い始めたそう。また、中学時代からの登山が後年ヨーロッパ・アルプスの山スキーにまで広がり、絵画教室に通っては「現場のスケッチから、せつせと油絵に仕上げた」とのこと。しかし、油彩での表現の限界を感じ見切りをつけたころ、かねてから関心のあった木口木版を始められたとの由。「あとがき」にあるこうした経緯を読むだけで、松澤さんにとっては少年期からの山と絵が、人生で常に身近な存在としてかたわらにあったことがうかがわれる。

そして、スケッチから油絵を描くことに始まり、あまり一般的でない渋い部類の木口木版に関心を移していったというのも、いかにも松澤さんらしく、面倒な素材調達の黄楊丸太を届けてもらうなど、まさに常日頃からの行動力がここ

でもものを言っている。

2018年に開催された個展の際に初めての作品集を上梓されているが、今回の2冊目は「回想と空想」と銘打って作品揃えをしている点に、作者の制作過程と作品選びの立ち位置が見えてくる。普段から何か一つを言うとその数倍の説が帰ってくる松澤さんだが、そうした弁の立つ、また人懐っこいところが、バレン（版木の絵の具などを紙に定着させる摺り道具）によつて楮紙上にこんな造形として浮かび上がってくるのか……と、画集を前に奥深く形なきものが姿を現わした感覚に浸る。

画集そのものもフランス製本の造りと装丁が美しく、開けば木口木版らしい様々な木の断面の造形美が活かされたレイアウトに、制作担当の白山書房との連携がさぞかしだったろうと思う。キャプションのフォント選択やポイント、配置、また、洒落たノンブル（ページ数）からも丹精な仕事を感じさせる。

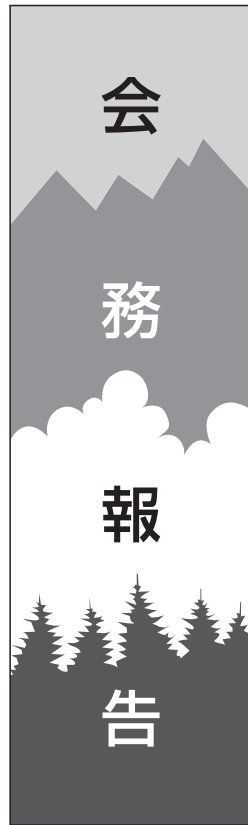
作品によってより直截的に作者像が伝わってくる抽象的な世界が展開されていく一方、半分以上が

具象の象形となっている。登山にまつわる題材、ヨーロッパ・アルプス訪問での思い出などとともに、木の実やカタツムリ、マユなどの自然、そして、屋久島や釧路湿原の情景なども収められている。目を惹くのは異色の若い少年の自画像的1点。それらは、画集の作品として楽しむだけでなく、もし可能であれば、松澤さん自身の語りを交えて鑑賞できたらどれほど楽しいだろう、と想像する。

回想と空想の象形、それは単なる思い出にとどまらない、博覧強記の松澤さんならではの思いが一つ一つの作品に込められている。スケッチや油彩などの作画であつたらこままでの味わいある表現が可能だったろうか？ 木口木版に魅力を感じ、この表現方法を選んだ作者の慧眼に思い至る。

(中村好至恵)

(問合せ) 白山書房 ☎ 042-669-4720



令和5年度第8回(10月度)理事会 議事録

日時 令和5年10月12(木)19時00分～21時15分
場所 集会所およびオンライン
(Zoom)

【出席者】橋本会長、永田・桐生・

飯田副会長、長島・南久松・平川各常務理事、松田・池田・望月・原田・川瀬・猿

渡・久保田各理事、佐野・石川各監事

【オブザーバー】節田会報編集人

【審議事項】

- 1・坂井広志会員からの高額寄付金の受入について(南久松) (賛成14、反対0)
- 2・評議員懇談会の開催および説明内容について(長島) (賛成14、

反対0)

- 3・支部連絡会の結果を受けて実施することを確認した(会報の電子配信、入会金見直し)(長島) (賛成14、反対0)
- 4・首都圏活性化に向けて東京支部設立を検討する方向を確認した(長島) (賛成14、反対0)

- 5・晩餐会のJTBへの外注について承認した(長島) (賛成14、反対0)

【協議事項】

- 1・次年度の事業計画と予算について協議した(長島)
- 2・Google Workspaceの利用について協議した(永田)

【報告事項】

- 1・海外登山助成について(桐生)
- 2・寄附金および助成金受入について(南久松)
- 3・JAPAN TRAIL FORUMへの出展について(久保田)
- 4・秩父宮記念山岳賞の進捗状況について(飯田)
- 5・各支部から要請される会合・イベントへの理事の参加について(桐生)
- 6・管理人室(居住居)の借り受け

について(長島)

- 7・首都圏活性化検討会の状況報告(松田、平川、長島)
- 8・晩餐会準備状況、秩父宮記念山岳賞について(永田、飯田、長島)
- 9・晩餐会の講演および、若者向けの立食会について(永田、長島)
- 10・入会承認報告(橋本)
- 11・YOUTH CLUBの備品の取り扱いについて(永田、平川)

ルーム日誌 10月

- 2日 財務部会 平日クラブ
- 3日 スケッチクラブ
- 4日 記念事業委員会(山岳古道調査) 山行委員会
- 5日 常務理事会 YOUTH CLUB委員会 山岳地理クラブ
- 6日 山の日事業委員会
- 10日 総務委員会 フォトクラブ アルパインスキークラブ
- 11日 休山会 山想倶楽部 かつぱの会
- 12日 道のり山の会 理事会 九五会
- 13日 自然保護委員会
- 16日 総務委員会

寄附金および助成金などの受入報告(10月まで)

寄附者など	受入金額など (単位千円)	寄附の目的、その他
石川 春 様	50	登山道・山小屋等登山環境維持向上のための寄附金

17日	麗山会 沢登り同好会Ⅱ
18日	つくも会 マウンテンカルチャークラブ
19日	三水会 科学委員会 山遊会
20日	図書委員会
21日	アルピニズムクラブ
23日	資料映像委員会 総務委員会
24日	00会
25日	緑爽会 首都圏活性化チーム
26日	記念事業委員会(コーカサスの桜) 公益法人運営委員会 学生会部
27日	記念事業委員会
30日	バックカントリークラブ
31日	総務委員会

10月来室者 325名

会員異動

物故

筒井 稔(7163) 23・9・25

退会

I

N

F

O

R

M

A

T

I

O

N

インフォメーション

船越谷渉(15730)北海道
小西 晃(15911)静岡
服部博子(16759)北海道
高田忠典(16855)福井

◆2023年フォーラム「登山を楽しくする科学Ⅻ」

科学委員会

フォーラム「登山を楽しくする科学Ⅻ」を開催します。

日時 12月23日(土)13～17時(受付は12時30分から)

会場 立正大学品川キャンパス「ロータスホール」品川区大崎

4-2-16(JR大崎駅北改札西口徒歩5分「山手通り口」からお入りください)

演題と講師 1.「富士山噴火と登山者」藤井敏嗣氏(山梨県富士山科学研究所所長)

2.「これでいいのか登山道」(登山道のあるべき姿と今後を考える)上 幸雄

と今後を考える)上 幸雄

インフォメーション

氏(登山道法研究会代表/日本山岳会会員) 3.「道迷いはなぜ起こるのか?」

羽根田 治氏(日本山岳会会員)

申込み 12月15日までに木曾雅昭へ氏名(ふりがな、会員番号)、住所・電話番号を✉Mail: kagaku@jac.or.jpへ。

定員 先着150名(受講票は発送しません。定員超過時のみ連絡します。)

費用 500円(資料代、当日受け取り、学生無料)

問合せ先 木曾雅昭(090-2536-7170)

◆編集後記◆

●大分県・国東半島の六郷満山と呼ばれる寺院群の僧侶たちが峯入り行を行なった修行の道をベースに設けられたのが、「国東半島峯道ロングトレイル」です。その10周年記念・全国フォーラムに招かれて出席、10コースあるトレイルの1つを体験ウォークしてきました。●そこには日本の原風景があり、トレイルから俯瞰した田染^{たしよのぞ}の田園風景には感激しました。宇佐神宮の荘園が営まれていたという1000年前からの景観が、ほげそのまま残っているのです。また、「お接待」という、四国遍路と同じ習いが残っているのも嬉しいことでした。「鬼が仏になる」と言われる国東ですが、日ごろ「鬼○○」と呼ばれている方、一度峯道を歩いてみてはいかがでしょうか。(節田重節)

日本山岳会会報 山 942号

2023年(令和5年)11月20日発行
発行所 公益社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビューハイッツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433
FAX 東京(03)3261-4441
発行者 日本山岳会会長 橋本しをり
編集人 節田重節
Eメール: jac-kaiho@jac.or.jp
印刷 株式会社 双陽社